

一緒なら、 きつと、 うまく行くさ。

四十歳になって数年が過ぎた厄年といわれる頃、わたしは極度な不安感に襲われました。

理由はわからない。突然、頭に濃密な風が吹き抜けて、ホームページになった。希望のない日々。生きづづけるより、死んでしまった方が楽だという思いに支配される。

こころは壊れているけれど、仕事はいくらでもできた。不思議だなあ。

その頃は一九八〇年代の、日本全国アコリヤコリヤの時代。したがって、世の経済性の影響をまっすぐに受ける広告屋としては活況のとき。外国ロケも多かった。でも、ロケ先のホテルの部屋は、必ず低い階を選択し、窓の開かない部屋を指定していた。

飛び降りそうでコワかったのだ。成田まで行って、やっぱり息苦しくなって帰ってこることもあった。

ほんとは、すぐに医者へ行けばよかったのだ。ところが頑固なわたしは、自分の力で治してやろうと意地を張った。おかげで三年近くも冷や汗を流す苦しい日々を送ることになってしまった。

最後のさいご、友人に説得されて医者へ行った。強迫神経症という診断であった。イキがって、生意気をやってきたけれど、人間、弱いもんだと思った。

そのころの変化は、やはり仕事に出た。コピーライターという、言葉を使う職業だけに、それが如実だったのかもしれない。こころの病理に触れるような表現が増えていた。もちろん、無意識のうちにである。

「一緒なら、きつと、うまく行くさ。」

「生きるが勝ちだよ、だいじょうぶ。」

「大切なものは、そう多くない。」

「な〜んだ、捜していたのは、自分だった。」

「あなたが、そんなとき、電話できる人」

「今日、私は、街で泣いている人を見ました」

結局、自分が聞きたい言葉を書いていたのかもしれない。



1947年京都市生まれ。日本の広告界を代表するコピーライターで、カンヌ国際広告映画祭金賞など数々の受賞歴をもつ。代表的なコピーに「反省だけなら猿でもできる」、「目の付けどころが、シャープでしょ。」、「愛情一本チオビタドリンク」など。